



平田藤義(ひらた・ふじよし)

(1945年2月3日生)

1967年 KURASHIKIブラジ

電気・水・ボイラ担当主任

1973年～1997年、ROHMブラジル生産管理課  
長/製造部長/工場長/副社長/社長

2002年～ブラジル日本商工会議所 事務局長、

2003～5年、「現代ブラジル事典」編纂のブラジル  
側コーディネーター

日外協の2008年5月号、月刊グローバル経  
営情報誌「現地報告—ブラジル経済最新情勢」  
に寄稿

## ブラジル発祖国日本・ 郷土与論への提言

鹿児島県与論町茶花  
出身・伯在住 平田藤義

### 一 はじめに

静寂の夜、茶花の浜辺で仰向けになり、ザーと寄せて返す波の音に心の鼓動が止まなかった少年時代、島に残り病症の母を看病。しかしその甲斐もなくやがて母と死別、流れ星の行方に己の運命を任せ、潮風に胸一杯膨らませ水平線の彼方の星の下に希望を託した。親父の口癖「人生至るところに青山あり」(村松文三作『題壁』)を胸に秘め、島を捨てる思いで舢舺から本船に移った。思春期の秋、まだ15歳になったばかりだった。

1967(昭和42)年2月27日神戸港を出発、3月2日横浜港を後にしたアルゼンチナ丸は、途中ホノルル、ロスアンゼルス、パナマ運河を通過、キュラサオ、ラグアイラ、アマゾン河口に位置するベレン港、リオ・デ・ジャネイロに寄港後、約40日間の航海を終え4月12日、サントス港に上陸した。もうあれか

ら43年が過ぎ、半世紀が目前に迫っている。

これまでの己の人生とは何であったのか、その反省すべき時期に与論教育委員会教育長から、とてつもない過大なテーマ「日本への提言」について執筆を依頼された。浅学非才な自分には重すぎるが、敢えて挑戦させて頂ける機会を与えてくれた田中國重教育長に心からお礼を申し上げたい。

## 2 ブラジル紹介

地球上で最も遠く真反対の位置から、常に複眼的思考で見つめてきた祖国日本・郷土与論に対し、ブラジル人生、半世紀の総決算のつもりで個人的な見解をありのままに述べてみたい。

もし平均的な日本人に対しブラジルと言う国を尋ねたら、恐らく10人のうち8～9人は間違いなく「アマゾン、サッカー、カーニバル、サンバの国」と答えが返るのが通り相場である。かつてブラジルには1960（昭和35）年代後期から70年代前半にかけ、全世界からの企業進出ラッシュに沸いた黄金時代があった。世界中から年率二桁成長の「奇跡のブラジル」、「未来の大国」と呼ばれた時代だ。壮大な国土開発には世界中から外資の借入を必要とし、国家プロジェクトも目白押しの時代であった。

しかし、1973（昭和48）年と79年の二度に渡る世界的なオイル・ショックにより、高度成長は終焉。21年間に及んだ軍事政権は1985年、平穏無事に民政へ移行したもののインフレ抑制策として86年に通貨単位をクルゼイロからクルザードに替え、異端とも言えるショック療法（物価、賃金、為替を凍結）を採用するクルザード計画を強行したが経済は逆に悪化するばかりであった。

その後も深刻な不況が続き外資の流入が減るにつれ累積債務は著しく増加、国際金利も暴騰する中ハイパーインフレは慢性化し

た。貿易収支も赤字に転落、外貨準備高も45億ドルまで底つく寸前、1987年遂に一方的なモラトリアムを宣言、失われた80年代となった。

国際金融界からの信用も失墜、併せて政治・経済の混乱が崇り、世界の金融・経済界からは「永遠の大国」と揶揄された。特にこの時代、経営難に陥り撤退や経営統合を指向する現邦各社の本社は「糞あつものに懲りて膾こを吹くなます」の上に懐疑心から、ともすると後ろ向きのブラジル戦略を採らざるを得ない所が少なくなかった。また日本では、折からのバブル経済が崩壊し失われた90年代に突入、両国で合わせて20年間に及ぶ極めて不幸な厳しい冬の時代を経験した。

一方世界経済は1989（平成1）年にベルリンの壁崩壊、91年12月ソヴィエト連邦解体、冷戦終結後に歴史は大きく転換、情報通信技術と物流の劇的な発展により、自由貿易圏が拡大進行、大航海時代を彷彿させるグローバリゼーションへと移行した。先進国、発展途上国を問わず、且つ旧資本主義、旧社会主義を問わず多くの国々が利益追求を肯定・促進する新自由主義（ネオリベラリズム）や新保守主義的傾向（ネオコン）を強めグローバル化する中、ブラジルは社会民主主義的政権が誕生、世界の潮流とは全く反対に、異なる道を選択した。グローバル化に伴うメガ・コンペション（世界中の企業が、国境や業界を越えて地球的規模で競争を行う状態。大競争）の時代に生き残りを賭け、日本が東南アジア・中国・ベトナム・インドネシア・インドなど、特にアジア諸国に軸足を置き企業進出を大々的に展開する中、新しい世代の一般日本人にとっては最も遠いブラジルを一時的に忘れ去っ

たのは至極当然の事である。

ブラジルの失われた80年代を知る日本本社の経営トップ層の中で、特にトラウマ（「糞に懲りて・・・」）をお持ちの方々にとっては、アジア近隣諸国がブラジルを初めとする中南米よりも技術移転が容易で且つ採算性や又地政学的にも有利な投資先であったのは否めない。有能なビジネスマンは、アジア諸国のグループ企業へ優先的に配置され、人数的にもブラジルへの派遣者は激減していたのである。潮目は21世紀に入り先進国の経済成長が鈍化する中、高成長を加速させたBRICs（ブラジル・ロシア・インド・中国）の出現で大きく変わった。先進国を中心としたネオリベリズムの行き過ぎは2008年9月、リーマンショックに代表される100年に1度と言われる大きな「世界金融危機」が代償となって重く押し掛かり、世界的な制度の見直しや反省期とあって景気はまだ低迷したまま今日に至る。

BRICs 諸国は金融危機の影響が極めて低く、特にいち早く内需主導型経済でV字型回復を遂げたブラジルに今注目が集まっている。先ずその理由や将来、日本にとってどれだけ大事な国なのか、そのポテンシャルを見てみよう。

先ず国際的に「気候変動」「地球温暖化」が問題とされる中、人類の生命に欠かせない酸素量の15～20%は世界の肺に相当するアマゾンの森林から供給され、淡水量もほぼ同じ比率を持つブラジルは、環境分野のみならず食糧、資源・エネルギーなどの点からも世界の命運を左右する国である。ブラジルの国土面積は851万平方キロを擁し日本の約23倍、世界第5位にランクされているが、現在の既耕地面積からだけの食糧生産に於いて既に米国を凌駕しつつある。まだ米国の生産性には若干及ばないが、木一本伐採することなく労働力さえ付けば何時からでも耕地に転用可能な未耕地面積は日本の国土の数倍もある。

食糧生産を一切阻害せず砂糖黍からエタノールを生産、環境に

優しいリサイクル可能なエネルギーも豊富だ。ブラジルで生産される9割以上の自動車はアルコールとガソリンの如何なる混合比率でも走行可能なフレックス（Flex）車仕様になっている。バイオ・エタノールやバイオ・ジゼル油の先進国と言われる所以だ。

砂糖黍の搾りかすのバガスもアルコールや製糖工場の自家発電（火力）用に利用、余剰電力は近郊地域に売電するのが普通になっている。勿論ブラジルの発電は最も環境負荷の小さい水力発電が主体である事は言うまでもない。近年、揚子江の三峡ダム（1.8万メガワット）に首位の座を譲った世界最大規模を誇るイタイプー発電所（1.4万メガワット）は、その典型例である。連邦政府は今月シングー河ベロモンテ発電所計画を発表、稼働すれば1.12万メガワットを発電する世界第3位の発電所になる。

ブラジルは世界有数な高品位鉄鉱石を産出（露天掘り）、その予想埋蔵量に於いては410億トン位とされ世界屈指の規模を誇る。ブラジル産鉄鉱石は品質とコスト競争力が高く、同じ鉄鉱石の産出国である中国向けの輸出が首位を占めている。世界有数の非鉄鉱物・稀少金属資源保有国としても知られ、前人未到のアマゾン奥地の完全探査までには手が回らないのが現状だ。極最近ではブラジル大陸棚のほぼ全領域に分布する海底岩塩層下に巨大な油田も発見され、やがて世界の5大産油国に仲間入りする事が確実視されている。

以上、ブラジルと言う国がどれだけの酸素を世界に供給し又淡水を保有し、食糧、鉱物資源やエネルギーの宝庫であるのか具体的に説明したが、まさに底抜けに明るいブラジル人のジョークにある「神様はブラジル人だ」は現実そのものである。

以上の記述だけでは食糧・資源・エネルギーなど一次産品だけのコモディティー（必需品・日用品・商品）輸出国をイメージさせられるが決してそうでもない。既に日本の空には伯国産エンブラエル社製の燃費効率の高いハイテク中型旅客機が導入されてい

る。中国にも合弁事業を展開するエンブラエル社はボーイング（米）、エアバス（EU4カ国、仏に本社）に次ぎボンバルディア（カナダ）と並び世界第3位、4位を争う航空機製造企業として成長、大半は米国向けに輸出している。

自動車生産に於いても世界第6位の生産量（販売登録第5位）を誇り、その裾野産業は広いため自動車部品をはじめその他の工業製品の輸出が一次製品の輸出高を超えている。半製品を含めた工業製品の輸出に占める割合は、過去5年間の平均で64%である。（出所：商工開発省）

世界100カ国を超える人種が集まり各々の文化を大事に温存しながらポルトガル語を共通語として民族や宗教上の争いもなく平和に暮らしている。テロもなく且つ政治的にも安定した理想的な統合国家と言える。

先進諸国の人口は減少傾向を辿る中、ブラジルの総人口は約2億人、2050年には3億人に達する予想があり、将来に渡ってずっと活力を維持できる国の一つだ。日系コロニア社会は今や150万人に膨らみ、ブラジル社会の要となる分野で中心的な役割を担い、勤勉正直な日本人として信頼されている。官僚・政治家・財界人等、ブラジル人の大半が親日家と言っても決して過言ではない。

### 3 ブラジル外交に対する日本への提言

このようなブラジル（人）を日本（人）は真の戦略的パートナーとして観ているのだろうかちょっと疑問に思える。「日本に無いのは全てブラジルにある」、その逆「ブラジルに無いのは全て日本にある」事を理解し、理想的な相互補完或いは依存関係の国としてどれだけの日本人が意識しているのだろうか。

通信インフラの分野では地上デジタルTV技術が日伯方式の形で

ブラジルに導入されたのをきっかけに、ペルー・アルゼンチン・チリ・ヴェネズエラが日伯方式に追随し始めた。日伯方式が中南米の盟主国ブラジルに導入された為、同一方式が中南米全域の規格・標準になるのは合理性やコンテンツの共有化を含め間違いのないところだ。

今、高速鉄道の分野でも日本の新幹線の導入が話題となっている。世界の強豪六カ国も政・官・民が一体となり国を挙げて入札に参加、今年半ばには落札される見通しである。現連邦政府の経済加速化プログラムの中では、最大規模 1 兆 7 0 0 0 億円（現地通貨 3 4 0 億レアイス）の予算が計上されている。もし新幹線の導入ともなれば莫大な経済波及効果が期待される一方、ブラジルにおける日本のプレゼンスは計り知れないものになるだろう。

日本には過去営々と培って来た世界に誇る冠たる生産技術・ロボット技術・省エネ環境技術が豊富にある。ブラジルがインフラ投融資と並び最も必要としている技術である。青い地球を守るエコビジネスを名実共に開花させる意味から 2 0 1 4 年のワールドカップはさておき、1 6 年のリオ・オリンピックをエコ・オリンピックと呼称し開催する提案もある位だ。リオ・オリンピック以降も引き続きビジネス・チャンスが一杯である。

技術のトランスファーには在日出稼ぎ者 3 0 万人を立役者にすればよいし、在ブラジル 1 2 0 万人の日系人もその受け皿となり得る。この辺りに日本の中小企業の生き残り策があるかも知れない。ブラジルにおいては日本の大企業を支えている中小企業の出番も未開拓分野であるからだ。

サンパウロ人文科学研究所顧問の宮尾進氏が日本移民 8 0 年祭に行った日系人調査をベースに計算した推定値によれば、現在、日系人の合計はおよそ 1 5 0 万人位とされている。その中で 4 世代の占める割合が最も多く、現在その 8 0 % が混血で構成され 5 世代にでもなれば、ほぼ 1 0 0 % に達する予想だ。しかし元々混

血が大半を占める一般ブラジル人の中にも日本語や日本文化に興味を持つ人口は少なくない。両国間で21世紀に最も相応しく理想的な人材交流が大いに期待できる。

ブラジルの不毛の地（酸性土壌質）であったセラードの開発は1970年代の初頭、国家プロジェクトとして日本がODA開発援助として参加協力した。首都ブラジリアからアマゾン川に分布する2億ヘクタール余の広大な大地だ。今世界有数の食糧基地になったブラジルは日本に対し、その恩を決して忘れていない。しかしその物流は欧米の穀物メジャーに握られているのが甚だ残念である。

将来、中国を筆頭に世界の発展途上国が今より豊かになりインドやアフリカ等、新興需要国が爆食に転じた場合に何が起こるか簡単に想像できる。資源・エネルギー・食糧の分野で需給逼迫が起こり、もし異常気象にでもなれば最初に食糧の争奪戦となるのは明らかだ。

各国の利害が対立する中、国連の議題として食糧安全保障が俎上に挙がり、世界の最大食糧供給国のブラジルが需要国へ枠制度を設け調停役になっている姿も見えてくる（個人的な想像）。やがて日本が食糧安全保障と言う世界の枠組みの中で買い負けに転じてからではもう手遅れだ。

#### 4 まとめ

日本にとって近隣のアジア諸国は重要なパートナーであるが、そのアジアのパートナーの国々がブラジルをより重要な通商パートナーとして、ブラジルに急接近している事に日本はもっともっと注意を払うべきである。昨年、中国国家開発銀行（CDB）がブラジルの社会開発銀行（BNDES）を通じ、ペトロブラス（ブラジル石油公団）の岩塩層下の油田開発に100億ドル融資、エネルギー

資源確保に布石を打っているのはほんの一例である。

1908（明治41）年のブラジル日本移民から100年に及ぶ信頼関係の上に立って、これからの100年、21世紀に向かい、ブラジルを真の戦略パートナーとして位置付け、最も遠くて一番近い国とすべきではないか。

（2010年3月22日記）

一般事情

国土面積：851.2万平方キロメートル（日本の22.5倍の広さ）

総人口：約1億9,400万人（2008年の国連統計）

首都：ブラジリア

民族：欧州系55%、混血38%、その他12%

共通言語：ポルトガル語

宗教：カトリック約74%、プロテスタント約15%、

（2000年地理統計院）

出所：外務省サイト <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/BRAZIL/data.html>